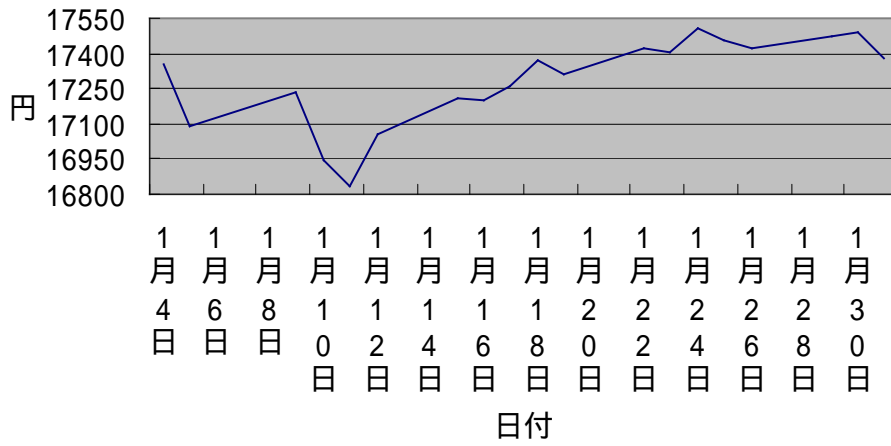
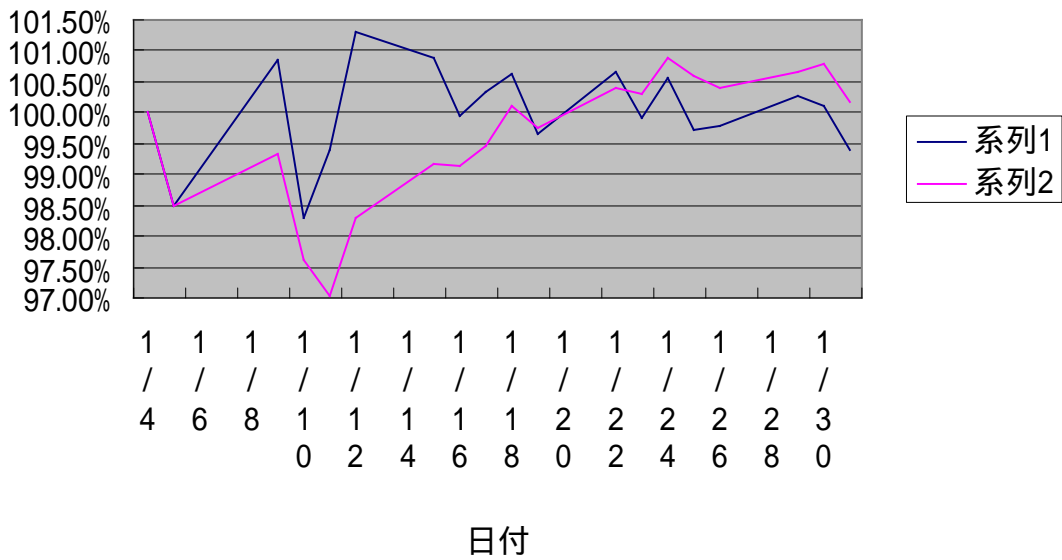
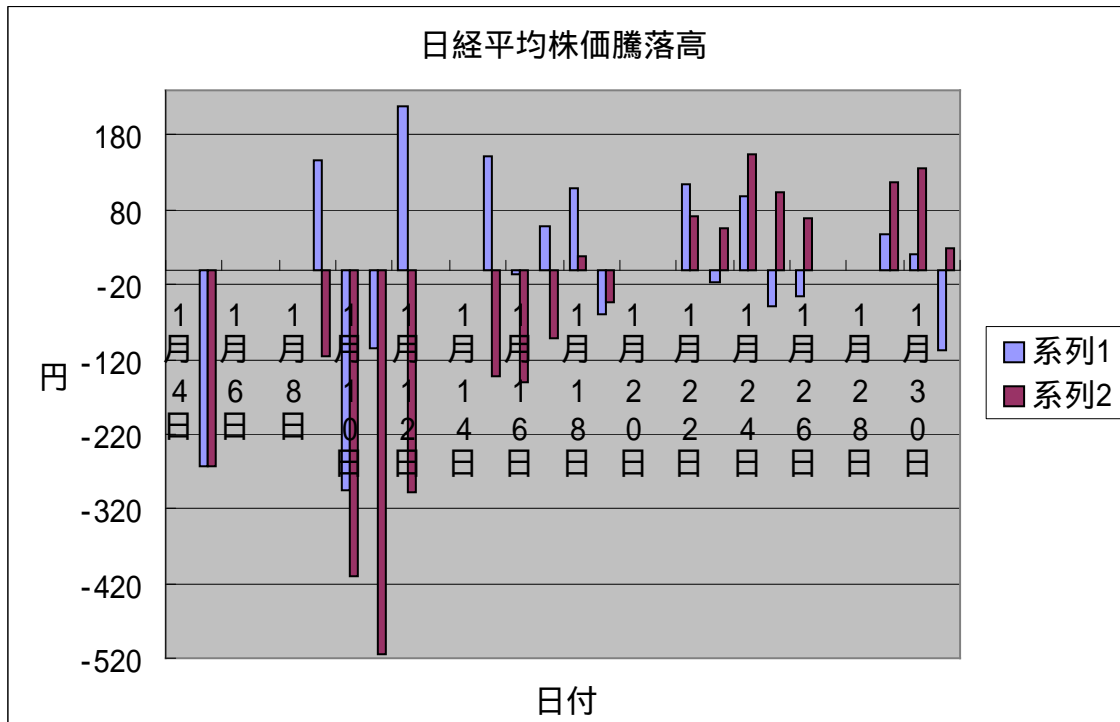


日経平均株価終値



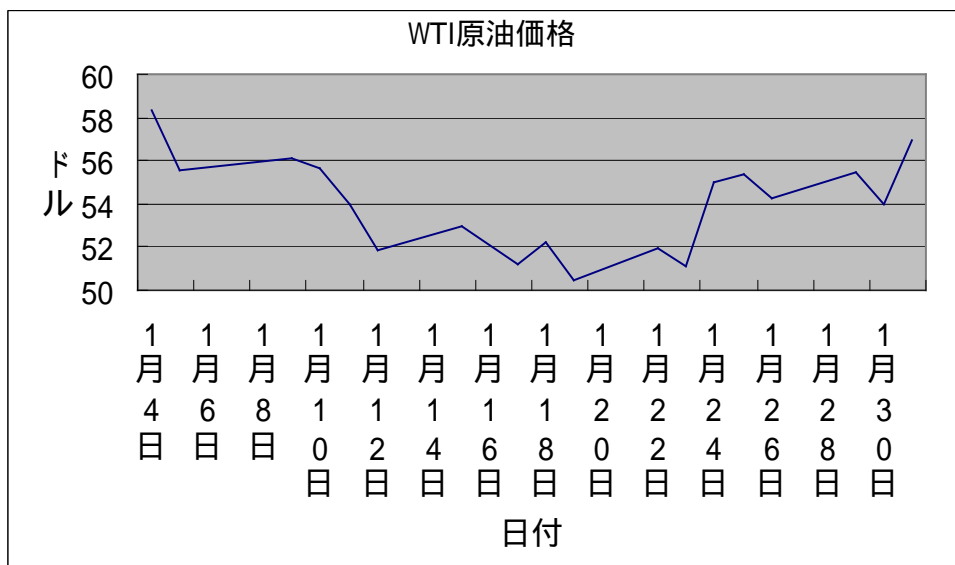
日経平均株価終値趨勢比率

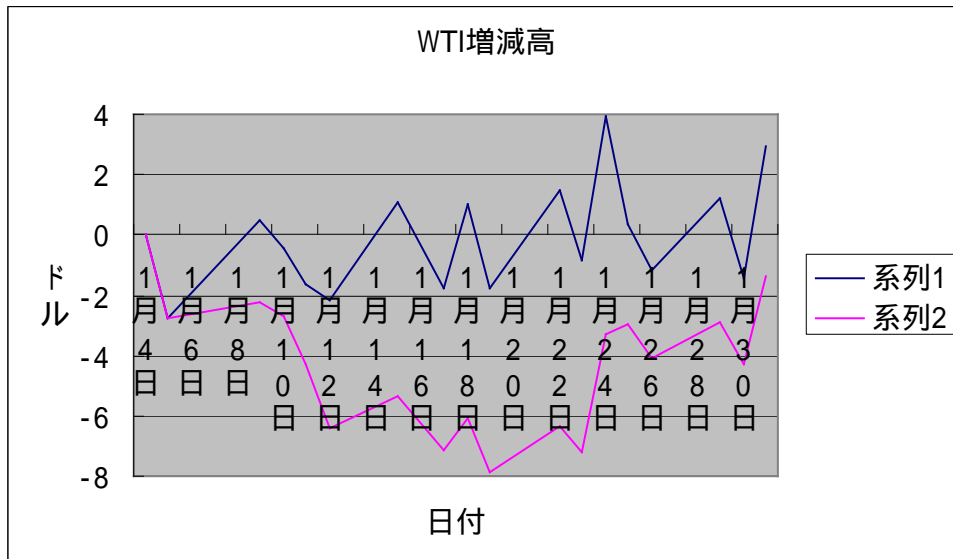




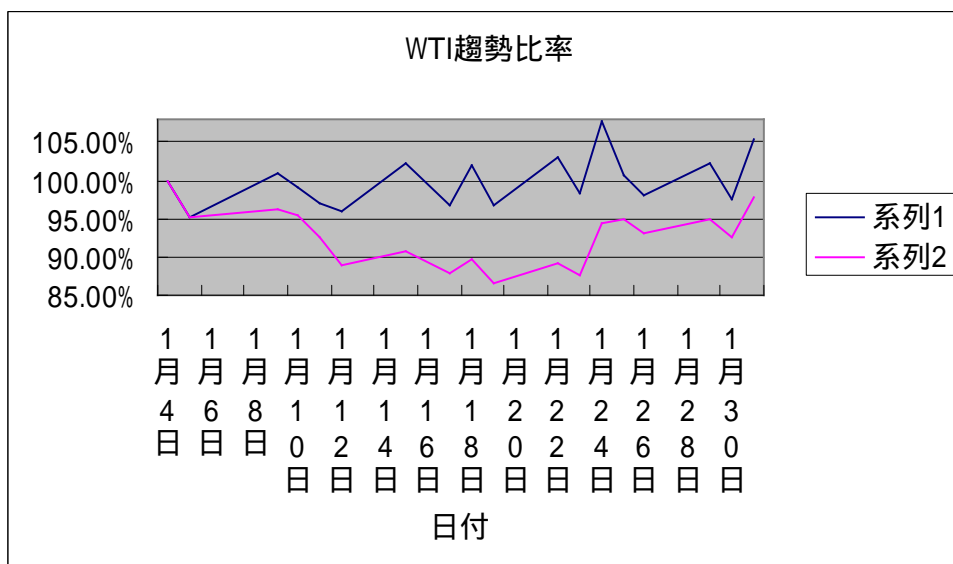
(3)原油市場

1月の原油価格は20日までは下落へ転じた。理由としては暖冬予報と原油の余剰により灯油等の需要が減った事から原油高下落へと結びついた。月末にかけては暖冬予報から寒気の影響を受けるとアメリカで報道があったことから原油価格がじりじりと上昇していった。以下のグラフを参照。





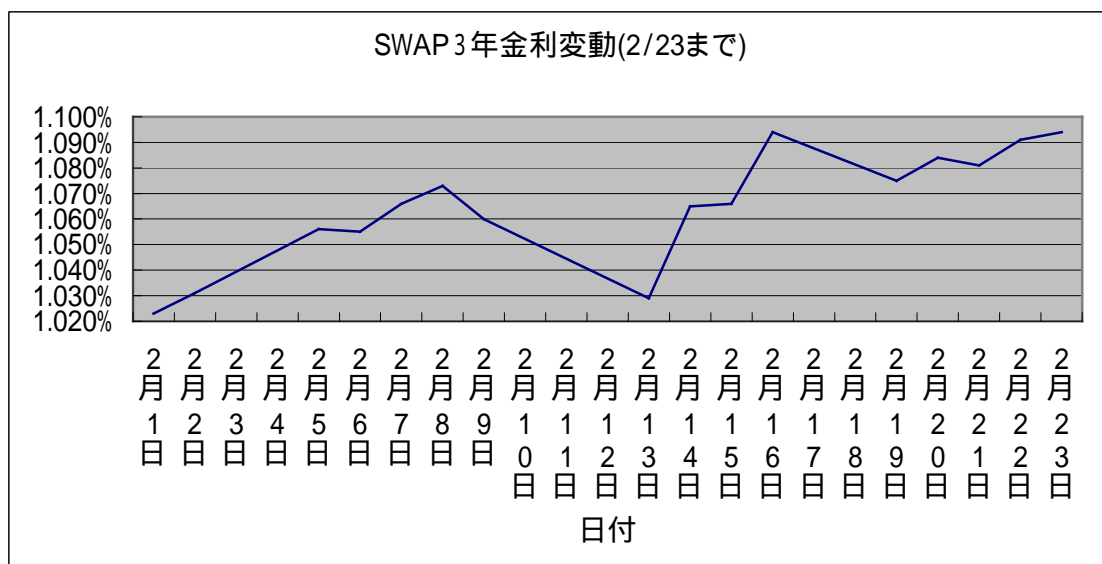
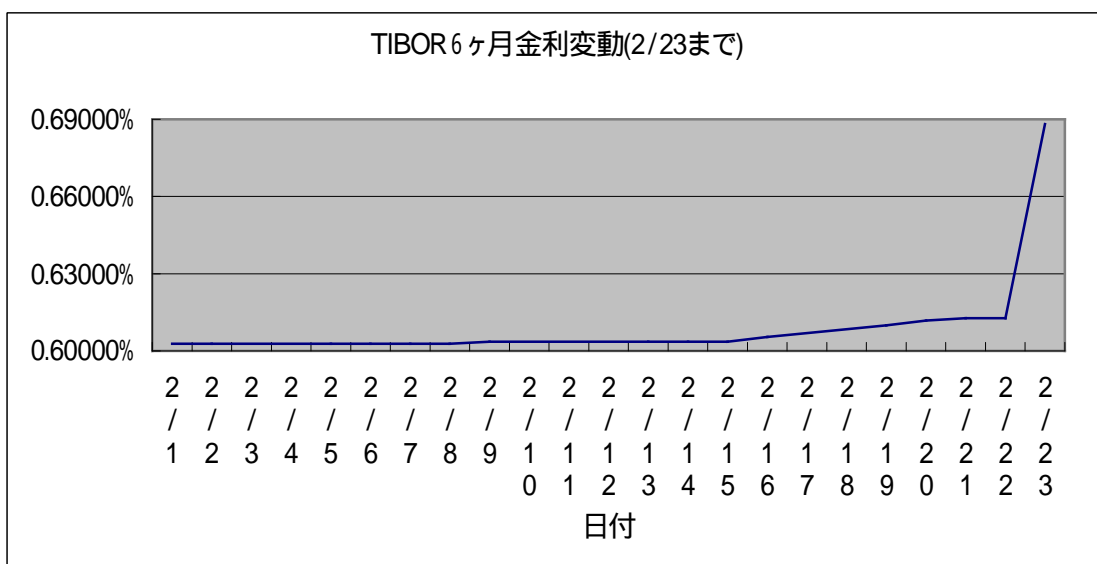
このグラフでは青い折れ線が前日終値を基準として増減したかを指し示し、赤い折れ線では、1月4日との終値を比較し原油価格がどのように推移しているかを指し示している。1月20日は4日の終値よりも8ドル近く安くなったことがわかる。逆に寒気が再びもどってくるとの情報が伝わってからは23日から24日で4ドル近く上昇したのが青い折れ線を見てわかる。



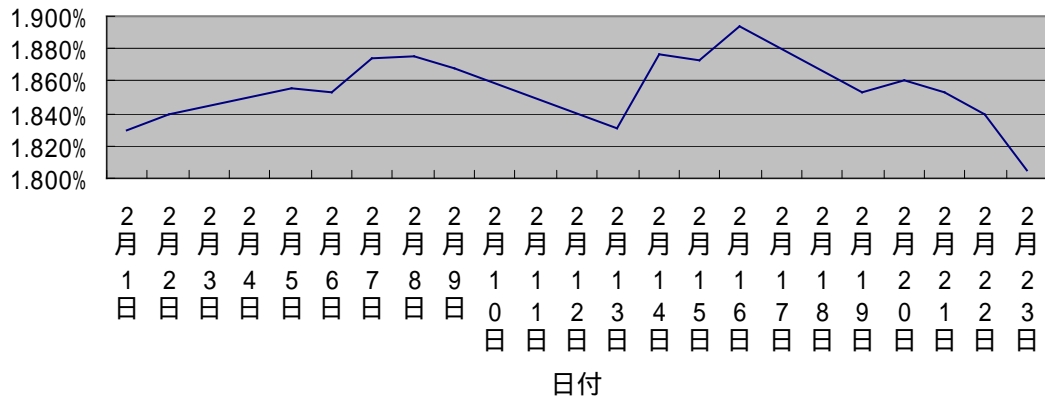
WTI 増減高のグラフをパーセントで表したものが趨勢比率のグラフである。1月4日の終値から15%近く下落したのがわかる。

(4) 2月23日迄の金利・株価の動向

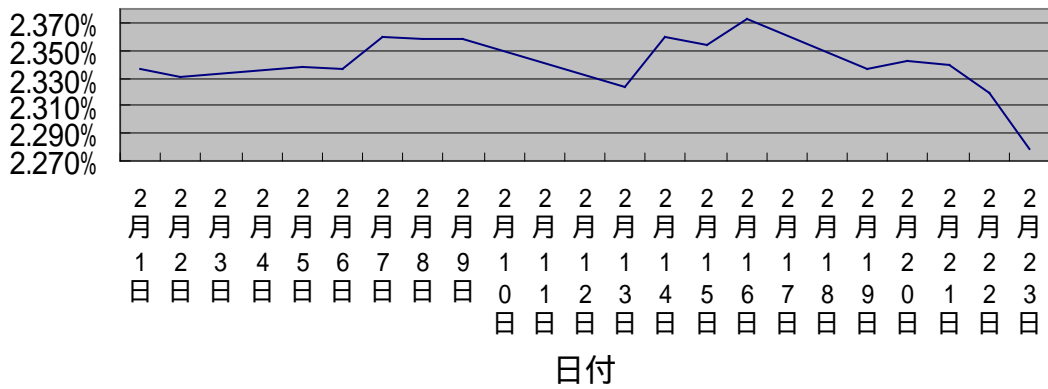
2月中に発表された10-12月期のGDP速報値が市場予想の3.8%を大幅に上回る“4.8%”の数値であった。この結果について福井日銀総裁は後に、「消費に弱い部分は見られるが、日本経済は緩やかな経済成長を遂げ、好調な企業部門の資金が徐々に家計部門へ流入する」と言う声明を発表した。20-21日の政策決定会合で利上げを行い、TIBOR6ヶ月は大幅な上昇となっている。本来、金利の引上げは、円高・債券安・株安に働くはずであるが、市場では次の利上げは夏以降という冷静な見方を取り、円安・株高の動きとなっている。



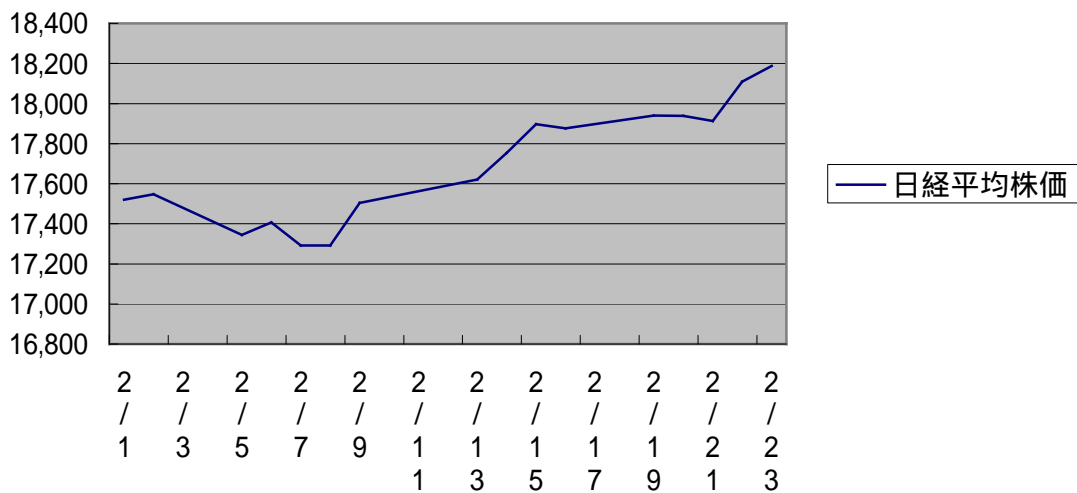
SWAP10年金利変動(2/23まで)



SWAP20年金利変動(2/23まで)



日経平均株価



(5)3月末の短期金利・長期金利、日経平均株価予想

安西予想

金利

まずは、TIBOR 6ヶ月の金利であるが利上げを実施したことにより金利は大きく跳ね上がった。しかし次回の利上げ実施時期が夏以降である事から金利が今以上に上昇したとしても2月末～3月第1週目くらいだろう。3月末時点での金利は0.7%～0.705%位だろう。

次に国債10年であるが、1.65～1.685%辺りで推移しそうである。これは利上げに伴い大きく下落したことや3月に国債の大量償還があることから1.7%までには戻らないだろう、しかし、1.65%を切る程の下落幅にはならないだろうと考えている。

日経平均株価

株価は、年が明けてから好調をキープしているが3月になっても陰りは見えないだろう。ただ、株価先物の判断材料となる特別精算指数が発表される日から3日～5日前は購買意欲を掻き立てるような有用な情報がなければ一時的には株価の下落も考えられるだろう。ただ、株価の好調さは続くと考え平均株価終値は18,500～700円あたりまで上昇しそうだ。

原油価格

原油価格に関してはニューヨーク等の気象情報に対して過敏に価格が変動しているので絞り切る事は難しい。予想に幅を持たせ57～62ドルくらいを予想している。

川邊予想

2月21日に日銀金融政策決定会合において、去年7月のゼロ金利解除以来の追加利上げに踏み切った。2月16日に公表された、去年10-12月期の実質GDP成長率が当初の市場予測が3.8%であったのに対して公表値が4.8%であったことが追加利上げに踏み切った一番の要因だと考えられる。しかし、先月1月の金融政策決定以降、公表されていた10月の機械受注統計・消費者物価指数等の各経済指標を見ても良好なものではなかった。また、1月の金融政策決定会合の直前に自民党幹事長、政府与党から日銀の追加利上げの観測を受け政治圧力があつたことは事実である。政府与党の圧力により追加利上げを見送ったことにより日銀不信を招きかねない状況であった。

このことから、2月の金融政策決定会合において追加利上げに踏み切ったことは、日銀の独立性と政府与党との政策のバランスをとった最良の選択だったと思う。

政策金利を16日に即日誘導目標を0.25%から0.5%にシフトしたとはいえ、欧米をはじめとする諸外国の6%程度の政策金利と比べると大きな開きがある。また、日本の金利水準は低い状況と言える。このことから円安傾向には変化は見られないと思う。

5月に三角合併の解禁を控えており、円安・割安な株価の日本は格好のターゲットになりか

ねない。

現在の状況を加味し、3月末時点での日経平均株価・10年国債・6ヶ月TIBORの予測をすることにする。

日経平均株価

3月末までの日経平均株価は、現在の株価の高値を警戒する状況や3月決算の4月でもあり様子見ムードが広がり、レンジ幅が浅い相場になると予想される。3月末時点の予想は18,000~18,400円程度であろう。

株式相場の格言に「節分天井・彼岸底」というものがある。これは、株式相場が節分のある2月に天井をつけ、3月後半のお彼岸の時期には1年を通してみると底になっているケースが多いとされるものである。根拠はないのだが興味深い。2月2日の日経平均株価は17,532円であった。今年の相場は節分天井・彼岸底であろうか？

金利

TIBOR6ヶ月

TIBOR6ヶ月は、追加利上げを受け上昇基調であろう。上昇率は2月初から26日までの上昇率が15.5%であったことを考慮しても最低5~10%程度は上昇するのではないかと予想。TIBOR6ヶ月レンジ0.72000~0.7500%。

国債10年

国債10年は、短期金利であるTIBOR6ヶ月とは逆に下落するだろう。予想国債10年は21日の追加利上げを受け21日の1.714%から26日の1.686%と約2%の下落を迎えている。このことから1.680%~1.600%程度で推移すると予測する。

樋口予想

金利

日銀の2月の利上以降、TIBOR6ヶ月は急激に上昇し、2/26に0.69%を超えてきた。市場では、次の利上げは夏以降との予想が大方を占めている。この予想理由は、今まで発表されてきたGDPの値や消費者物価指数、消費動向が今後も大きな変化をしないという前提であろう。仮に、強い数値が出れば、早期の利上げ説が浮上し、短期金利を中心に上昇していこう。

自己の生活を例にして恐縮だが、この冬は暖冬の影響もあって、衣料品の購入は一切しなかった。冬に買い控えた分、春物の衣料品やその他の物品購入費・交際費は、支出を増やすのもいいかと思っている。私みたいな人が多いのであれば、消費の数値は今後、伸びる可能性がある。と言うより、伸びると予想している。また、物価上昇要因の一つである、原油や金等の資源価格は、中東の地政学リスクを背景に徐々に上昇してきている。3月末の時点で、予想を上回る消費者物価指数の数値が発表され、市場は早期の利上げに警戒感

を抱き始めているものと予想し、TIBOR 6 ヶ月は 0.71% ~ 0.715%まで上昇していると予想する。

10年物国債は、現在の数値とほぼ同じ 1.65% ~ 1.7%と予想する。

日経平均株価

株価は、世界的な業界再編・M&A、配当取り等の株価上昇要因になる材料はあるが、相場の牽引役である外国人がこのままずっと日本株を買い続けるとは考えにくい。買った株はいつか売る時がやってくる。株価上昇の後には利益確定売り・換金売りが待っている。最近よく聞くようになった海外ヘッジファンドは、先物を利用して株の下落によっても多額の利益を享受する事が出来ると聞く。売りの増加 株価の下落 株に対する悲観論が更に売りを誘い、急下降になる可能性もある。3月末の株価は、現在の 18,000 円台から 17,500 円まで下落していると予想する。

以上

参考文献

債権投資ディリー

NIKKEI NET